みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Well-Being of severely handicapped people and Technology : On the activities of the Welfare Institution TOMO in Houmon-no-ie

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田坂, さつき, 生田目, 昭彦, 水谷, 光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000955

鈴木七美編『「障害のない社会」にむけて ── ウェルビーイングへの問いとノーマライゼーションの実践 ──』
国立民族学博物館調査報告　102:31–58(2011)

第 2 章　重度重複障害者の「ウェルビーイング」と技術
── 社会福祉法人訪問の家「朋」の実践をめぐる考察 ──

田坂　さつき
立正大学

生田目　昭彦
訪問の家

水谷　光
湘南工科大学

Well-Being of severely handicapped people and Technology
On the activities of the Welfare Institution TOMO in Houmon-no-ie

Satsuki Tasaka
Rissho University

Akihiko Namatame
The Welfare Institution TOMO in Houmon-no-ie

Hikaru Mizutani
Shonan Institute of Technology

ケアのあり方の関心が高まるなか，施す側から施される側への一方的な支援ではなく，当事者それぞれの「ウェルビーイング（Well-Being）」に視点を移す必要が指摘されている。横浜市栄区桂台にある社会福祉法人訪問の家「朋」では，行政と地域との協働で，重度の障害者のウェルビーイングの実現を模索してきた。そこでは，工学部学生が中心となり，個別の障害者のウェルビーイングを目指した生活支援具を個別に製作する「福祉ものづくり」が，技術者教育プログラムとして実施されている。

本論文では，この取組みを倫理的な視点から分析する。まず，支援者と当事者との出会いの場から拓かれるケアリングという関係性を指摘し，次に当事者のウェルビーイングを協働探求する営みにおける支援者のウェルビーイングの形成等を明らかにする。そして最後に，技術者がケアの観点に立つことの重要性を論じ，それを実践的に学ぶためには，朋のような場が有効であることを示す。

The Welfare Institution TOMO of the Social Welfare Juridical Person Houmon-no-ie was established for severely handicapped people (Katsuradai, Sakae-ku, Yokohama City). The staffs of TOMO have created various activities for serious handicapped people, and “Welfare manufacturing” is one of the activities by the collaboration with students of Institute of Technology and others. “Welfare manufacturing” means producing support equipments to realize well-being of a handicapped person, which is carried out as an engineer educational program.

In this paper, we analyze the activities of “Welfare manufacturing” in TOMO from an

ethical point of view. First, we describe that the caring relation is build from the encounter with handicapped people and supporters. Secondly we argue that in “Welfare manufacturing” students making equipment search to realize well-being of the handicapped people, and at the same time well-being of the supporters is gradually formed. And thirdly we conclude that it is important for engineer to create equipments on caring perspective, and Wellfare facilities as TOMO is effective to learn it.

1 はじめに
2 訪問の家「朋」
2.1 重度重複障害者の福祉施設
2.2 横浜市との連携
2.3 地域との連携
2.4 日中活動における WB の探求
2.5 教育との連携
2.6 ケアリング
3 福祉ものづくり
3.1「福祉ものづくり」創設の経緯
3.1.1 ボランティア体験学習
3.1.2 工科系学生の特性を活かしたボランティア活動
3.1.3 工学教育として
3.1.4 大学と福祉施設間の覚書締結
3.2 WB の実現と喜び
3.3 技術と教育
4 おわりに

＊key words: well-being, the daily activities of severely handicapped people, welfare manufacturing, caring, education, technology
＊キーワード：よくあること，重度障害者の日中生活，福祉ものづくり，ケアリング，教育，技術

1 はじめに

近年，ケアのあり方の関心が高まる中で，施す側から施される側への一方的な支援ではなく，当事者それぞれの「よきあり方」に視点を移し，福祉を「ウェルフェア（welfare）―以後 WF と略記する」ではなく，「ウェルビーイング（well-being）―以後 WB と略記する」として捉え直す必要が指摘されている（鈴木 2009: 9–10；鈴木・藤原・岩佐編 2010: i-v など）。WB の原義は「よくあること」である。アリストテレスは，『ニコマコス倫理学』冒頭で「あらゆる技術，あらゆる研究，同様にあらゆる行為も，選択も，すべてみんな，何らかの善を目指していると思われる（アリストテレス『ニコマコス倫理学』：1094a）[1]」という。すると，障害がある人に対しても，何らかの技術あるいは研究，あるいは何らかの行為や選択によって，「よくあること」を実現することが求められていることになる[2]。

ケアする側が当事者の WB に極力配慮しようと意識しても，それがケアする側の思いに留まるならば，当事者の WB の実現は難しい。つまり，ケアする側が一方的に思い描く WB を目指しても，それは依然として WF なのである。ケアする側が当事者の QOL が向上すると考えて行った措置であっても，当事者がそれによって自らの「よくあるこ

と」は実現されなかったとするなら，それはWBといえないからある。つまり，ある特定の状況で何が当事者のWBであるかを，第三者が規定することはできないのである。たとえば，障害や病とともに生きる人のWBを実現する１つの条件は身体的な快適さであると考えられるが，場合によっては，身体的な負荷をかけてもやりたいことがあるかもしれない。これは，当事者個人の生き方や価値観に関わることであり，当事者に聴く以外にはない。それゆえ，一人ひとりのWBのあり方を，どのように当事者とケアする側の共通認識の下に置くのかが重要になる。そして，個々の時点で「よくあること」は，当事者自身の生全体へと収斂されねばならない。その際，当事者の生き方，すなわち「よく生きること」がどのような形なのかが探求されなければならない。

しかし，何がWBであるかは，当事者にとって常に自明であるわけではない。そもそも「よく生きること」は古代ギリシア哲学以来，人間の生の課題である。プラトンの著作の中で，ソクラテスは，「ただ生きるのではなくよく生きること（プラトン『クリトン』：48b5-6）[3)]」を説き，また，「よく生きること」は自他の吟味をとおして探求すべきものだという（プラトン『ソクラテスの弁明』：38a4-7）。

障害や病等の困難を抱え，介護を必要としている人にとって，「よく生きること」は誰かの手を借りて実現することが多々ある。それゆえ，個々の時点で「よくあること（WB）」は，当事者の置かれている状況，広い意味での環境との相関関係を考慮しなければならない。そして，重度の重複障害があり，支援者に対して言語で意志を伝えることが難しい人たちに対しては，WBの探求は慎重に行わなければならない。

福祉をWFではなく，WBとして捉え直すべきだという主張の背景には，これまでの障害者福祉のあり方への反省がある。1960年代，日本では重度の重複障害児者に対して，街中から離れたところにある収容型の福祉施設で生活する制度が整備される一方，障害のある人が街中で親から離れて生活することは困難であった（安積・立岩他 1995: 167-174）。これは，社会的弱者とされる人々をどう処遇するかという発想の下に施す福祉が行われ，経済的な負担を最小限に抑えながら，支援する側が管理しやすさを優先した結果とみることができる。当時は，施す側から施される側への一方的な支援が行われていたのである。

1970年代の障害者自立運動（安積・立岩他 1995: 174-211）は，まさにこの点について，当事者の側から行政に再考を迫ったとみることができる。その結果，障害があっても地域で生きる選択肢を選ぶ人は増えたが，実際に地域で自立できるのは，自分の意思を明確に発信でき，経済的な問題解決が可能な人々に限られていた。いわば強い障害者であることを自立生活の要件として，社会の側が要求したのである。特に，24時間全介助で，医療的ケアが必要な重度の重複障害児者は，当時は障害者運動の枠の外に置かれていた。そして，現在の自立支援法設立に際して，身体障害・知的障害・精神障害者対象の制度を統合する経緯においても，重度の重複障害児者の地域生活はそもそも想定さ

れていなかった。それゆえ，重度の重複障害者の通所施設では，現行の自立支援法の運用に苦慮しているのである。

プラトンは主著『国家』で，技術とは支援を必要とする立場の人のニーズに応えるためのものであり，技術を行使する側のニーズや経済効率を追求するものではない，と述べている（プラトン『国家』：342b1-8）。これは「正義とは強者の利益である」という主張に対する反論を，ソクラテスが提示する文脈に置かれている[4)]。このことは示唆に富んでいる。なぜなら，国家行政等，支援する側の経済的な判断で，支援を必要とする弱い立場の人々の処遇を決めることは，まさに強者の利益が正義を決定している，といえるからである。WF から WB へという方向は，これを変革することを迫るものなのである。

それゆえ，支援を必要とする人々のニーズ，すなわち何が WB なのかを探求することが最も重要であり，それを実現すべく，行政・福祉・工学・医療はそれぞれの専門的な技術を駆使することが求められる。他方 WB は，支援を受ける当事者を中心に，介護の専門家だけでなく，親・知人・地域住民等，当事者の WB を改善できるあらゆる人たちと協働で探求する必要がある。そのためには，様々な技術や知見を駆使した WB 探求の場を拓き，協働で WB を実現することが重要である。そしてこの種の実践例を，特別の条件でのみ実現した特殊例に留めないためには，その倫理構造分析とその構築可能性の考察が不可欠である。このような実践と教育との連携は，技術者倫理等，次世代倫理教育として有効であると考えられる。

本論文は，重度の重複障害者の WB の実現を目指して改革を進めている社会福祉法人訪問の家「朋」（横浜市栄区桂台）の実践を分析し，WB の探求とその実現を倫理的な視点から考察する中で，教育の現場との連携の有効性を示すことを目的とする。本論文の構成は次のとおりである。第 2 節で朋の実践全般を分析し，第 3 節で，朋における湘南工科大学の福祉ものづくりに焦点を当てる。最後に，第 4 節で WB と技術という視点から考察をまとめる。

2 訪問の家「朋」

2.1 重度重複障害者の通所施設

社会福祉法人訪問の家「朋」は1986年 4 月に神奈川県横浜市栄区桂台に開所した。養護学校卒業後の行き場のない重度の重複障害者（重症心身障害児者）といわれる人たちのために地域作業所を開所し，7 年間を経てのことである（表 1 ）。その始まりは，1972年の訪問学級の開級に遡る。

1972年，横浜市では全国に先駆け，在宅の障害児教育担当にソーシャルワーク専門職を加えて，訪問学級を立ち上げた。日浦美智江は，その初年度の教員として，横浜市立

表１　社会福祉法人「訪問の家」の沿革（社会福祉法人訪問の家 2005：扉ページ）

年　月	事　　柄
1972年４月	横浜市が横浜市立中村小学校に特殊学級として訪問学級を開級
1979年４月	訪問学級の母親たちが母体となり，障害者地域作業所「訪問の家」を設立
1983年４月	障害者地域作業所「朋」を開所
1984年７月	（仮称）社会福祉法人「訪問の家」設立発起人会を設立
1985年12月	社会福祉法人「訪問の家」の設立許可が下りる
1986年４月	精神薄弱者更生施設「朋」を設立　日浦美智江が施設長となる
1990年３月	障害者地域作業所「らんぷ」のバックアップを開始
1993年５月	朋の２階に「朋診療所」を開設
1994年３月	グループホーム「きゃんぱす」を開設
1994年４月	知的障害者通所更正施設「集」を設立
1994年４月	「横浜市根岸地域ケアプラザ」の運営委託を受ける
1996年４月	障害者地域作業所「CAN」のバックアップを開始
1998年５月	グループホーム「どりーむはんず」を開設
1999年５月	法人型地域活動ホーム「サポートセンター径」を設立 「横浜市桂台地域ケアプラザ」の運営委託を受ける
2000年４月	日浦美智江が社会福祉法人「訪問の家」理事長となる
2001年４月	障害者ホームヘルプ事業「さくら草」を開設
2002年２月	グループホーム「アレグリア」を開設
2002年７月	グループホーム「フォーピース」を開設
2004年５月	訪問看護ステーション「さくら草」を開設
2004年８月	グループホーム「ひいらぎ」を開設
2004年11月	法人型地域活動ホーム「サポートセンター連」を設立
2005年５月	グループホーム「からーず」を開設
2006年４月	グループホーム「トポス」を開設
2007年２月	グループホーム「コム」を開設
2010年３月	日浦美智江が社会福祉法人「訪問の家」理事長を辞職し理事となる

中村小学校（横浜市南区）の訪問学級に着任した。訪問学級とは，学校での集団教育を保障しつつ，健康状態が厳しくなったら訪問指導にも切り替えられるという学級である。日浦は障害が重くても自宅に留まらずに小学校に通うことを勧める一方で，親との交流を進めグループワークを重ねた。その中で，どんなに障害が重くても地域の中で暮らしたい，活動したいという当事者，そして親の強い思いを知るようになる（日浦 1996: 61–78）。

高校を卒業する人は，一般に就職あるいは進学し，親以外の多くの人とのかかわりの中で成長し，社会に貢献する人材となる。親の側から見ても，学校を卒業した後は，子供の成長を見守りながら，自分自身のため，あるいは高齢の親のためにより時間が必要とされる。しかし，養護学校を卒業した後，就労できない障害者は長い人生を，主に家

族による介護の中で生きる。もし，障害者が入所という選択肢をとった場合，10代で親から離れて，入所施設のほぼ固定した人間関係の中で長い人生をおくることになる。どちらにしても，多くの人とのかかわりで自分の可能性を見出す，青年の自然な成長とは大きく異なる。重い障害ゆえに，極めて限定された人間関係の中で，長期にわたり同じベッドで同じ天井を見つめて生涯を閉じる生に，日浦は疑問をもつ。それは，「人は人の中で人になる」と考えたからである（日浦 2010: 214）。

日本の福祉は1970年代中期以降，地域から隔絶した施設に収容するというあり方から，地域で必要な支援を受けながら，家族との生活を基本形態とする方向へと変化してきた（安積・立岩編 1995: 200–210）。そして，1972年には，横浜市在宅障害者援護協会が創設され，横浜市は全国に先駆けて，行政と地域が障害児の親と協働で障害者福祉を実践してきた（酒井 2004: 60–161）。この頃日浦は，重い障害がある人々にも通所での活動の場が必要であると考え，この設立に向けて横浜市の行政，親の会，地域，支援スタッフと話し合いを重ねている。そして1979年，訪問学級の母親たちと日浦が中心となり，障害者地域作業所「訪問の家」を横浜市港南区野庭町に開所，さらにその４年後，横浜市中区打越に障害者地域作業所「朋」を開所した。このとき日浦は，訪問学級のソーシャルワーカーを退職し，朋の職員となる。

障害者地域作業所を開所したものの，訪問の家はプレハブ，朋は６畳と４・５畳の部屋で，車椅子を動かすこともできず時間を過ごしている状態であった。「彼らの青春時代がこのままでいいのか」と強い疑問を感じた日浦たちは，制度が全くない中で，作業所よりも広いスペースで多くの職員の支援を受けて活動を広げられる通所施設を設立し，地域の協力のもとで労働の場も創設していく。

2.2 横浜市との連携

日浦たちは，地域作業所，「訪問の家」「朋」を開所した際にも，横浜市の援助を受けた[5)]。しかし，通所施設を創設する必要を強く感じた日浦たちは，重い障害があるからといって，彼らの青春時代がこのままでよいのかという疑問を横浜市福祉局へと投げかけ，市との話し合いがはじまった。

重症心身障害児者の通所施設は制度にはない。しかし必要である。このような施設を創設することは，どのようにしたら可能なのか，横浜市が敷地を提供してくれないか。日浦は親と共にバザーで資金を精力的に集め始める一方，横浜市役所に何度も足を運び相談を続けた。陽の当たらない土地も候補にあがった。最重度で自ら動くことができない人が陽の当たらないところにいる，それがWBなのか，と日浦は横浜市に問いかけた。すると現在の桂台の地が候補にあがった。そこは，神奈川の高級住宅地として造成されたところで，富士山も見える一等地である。親がバザーでこつこつ集めた資金は3500万に及び，横浜市と厚生省，県からも資金を借入した（『朝日新聞』1986）。しかし当初，

日浦は，通所施設をこの地に建てることは，簡単ではないと思っていた。

重い障害の人は完全在宅か入所施設しかないと言われていた時代，住宅地に通所施設をつくるとは如何なものかという風潮が当時はあった[6)]。これは，重度の重複障害者施設が建つことに，近隣住民は違和感こそあれ，自分たちの生活に何らメリットを感じなかったからだろう。高級住宅地に文化施設はいざしらず，重度の重複障害者の通所施設はいかがなものか，という反対運動が起こる。このとき日浦は，朋こそ文化施設だと思う。人間の文化の中心は「生きる」ということにある。これに光を当てる場こそが文化施設だ（日浦 1991: 178–182），と確信していたのである。しかし日浦は，当時，声高な障害者の権利主張という手法で戦うことはしなかった。

中学校の体育館で説明会を開催した。地元の人たちは次々と反対意見を述べる。最後に赤ちゃんを抱いた若い女性が「日浦さんにお尋ねします。散歩に出ますか？出ませんか？」と尋ねる。建設を有利に進めるためにはどちらがよいか。市の担当者の意見も分かれた。日浦は「出たいと思います」と思いを伝える。それに対して，「どうぞ出てきてください，そしてお友達になりましょう」という答えが返ってきた。日浦はこの地域の人たちを信じて，一緒に歩んでいこうと決意する（日浦 1996: 93）。この説明会をきっかけに地元湘南桂台自治会の主婦の間から施設運営に積極的に協力しようという動きが高まり，勉強会や施設見学を行うようになる（朝日新聞 1985）。

着工後，市の建設関係者とは幾つもの見解の相違があった。２階建ての建物なのにエレベーターがないのはおかしい，と日浦が市の担当者に言うと，２階は地域交流の場所なので，障害のある利用者は２階には行かないだろうという答えが返ってくる。日浦は，２階が障害のある利用者にとっても交流の場所になってほしいと思い，市の担当者を説得し，エレベーターが設置される。その後朋は，２階に診療所が併設された通所施設となる。

2.3　地域との連携

開所から１ヶ月ほどして，地域のボランティアが日中活動の中に入ってきた。反対運動が起こった地域で，福祉について知識が乏しい40代が主流の主婦たちである。職員の多くは20代前半で，ボランティアとは親子にでもなりそうな年令差であった。しかも職員と朋の利用者（以後メンバーとする）は個人的にも，ほとんど知り合えていない。通常であれば難しいこのような状況の中，ボランティアの人たちは違和感なく朋に溶け込んだ。

これは，真ん中にメンバーがいたからであろう。両者はメンバーのWB実現にのみ集中した。そして日浦は，福祉の専門知識がない主婦層のボランティアに対して，社会人としては未熟な職員を育ててほしい，と頼む。ボランティアは一歩引いて職員を見守りながら，掃除や洗濯等，手芸品の完成等，裏方の仕事を進んで引き受けるようになる。

メンバーのWBを一致して探求し共に実現していくことにより，メンバー・職員・ボランティアの協働による活動が創造される。WBを探し当てるために様々な話をし，多様な人がそれぞれメンバーのWBを想像し，提案し，一致して試行していく。常に一緒に何かをやっていこう，そしてやっているという空気が流れる。

このような営みは，いつも地域に開かれていた。朋のメンバーのための土曜コンサートには，著名な音楽家[7)]が協力した。朋は，地域のコンサートホールとなる。文字どおり文化施設であった。このような方法で，朋は徐々に地域に根付いていく。

2.4 日中活動におけるWBの探求

生田目昭彦は，社会福祉法人「訪問の家」設立当初に朋職員として採用され，以来，朋と歩みをともにし，現在は朋施設長である。生田目は，朋の日中活動を以下のように捉えている。

朋は入所施設ではない。入所者は，24時間365日同じ場所に居続ける。もちろん，居室とディルーム間の移動は可能であるし，外出も可能であろう。しかし入所施設では，3回の食事や排泄介助，入浴を職員の夜勤外の勤務時間内に設定するために，タイムスケジュールの縛りがある。通所でも時間に制約はあるが，朋ではその人のWBの実現に寄与することであれば，場合によっては，通所時間を午後に切り替え，夜の外出や旅行も行っている。

また朋は学校でもない。それゆえ，指導要綱の縛りもない。朋では，その人個人が主体であり，活動の目的はまさしくWBであり，社会との接点，家庭以外の他者とのかかわりや活動の中で得られるWBを目指すのである。

しかし，日本でも前例がない通所という形の中で，言葉がなく身体的にも厳しい重度の障害をもつ人々への日中活動支援については，職員は手探りの毎日である。朋では，気管切開をして声を失っている人，胃ろうや腸ろうで経口栄養摂取ができない人が，メンバーのほとんどを占めている（表2）。それゆえ，メンバーのWBは，当人の言語表現によって確認することはできない。朋では，本人の意思をどのように確認できるのか，障害の重い人たちの日中活動の可能性をいかにして見出していけるか，という課題は重く，主として直接かかわる支援者の側に問われてくる。支援者の勝手な判断で他者のWBを決め付けてしまう危険が常にあるからである。職員は，メンバーの細かな表情の変化や身体の微妙な動きから「今感じている何か」を日々模索している。

朋は，設立時から，親と職員が車の両輪になってメンバーを支えていこうという理念の下，歩き始めた（日浦 2004: 34–40）。親と職員の協働は，開所当時からできてきたわけではない。はじめは，職員がメンバーのことを知るところから，親との協働が始まる。何が好きなのか嫌いなのか，どんな事に興味をもってくれるのか，食べ物，音楽，感触，…，親から情報を可能な限り集め，メンバーの細かな表情の変化や身体の微妙な動きか

表２　社会福祉法人　訪問の家「朋」（2011年３月31日現在）

年齢	最高	50歳
	最低	18歳
	平均	30歳
通所者数	定員	40名
	重症心身障害通園事業	６名
	経鼻経管栄養（胃ろうを含む）	21名
	気管切開	11名
	胃ろう	11名
	常時酸素	２名
身体状況	寝たきり 自力による起き上がり不可 関節可動域も小さい 他力介助は可能	
	座位保持可能 座椅子や車椅子の利用可	
	介助歩行可能 自力による歩行不可 介助者と一緒ならば歩行可	

ら反応を読み取っていくうちに，個々のメンバーそれぞれの人柄や性格を親から学ぶ。その中から，日中の活動可能性が探求されるのである。日々，これかなというものをつかみつつ，これでいいのかを確かめていく。施設の中ではこうだが，外出するとどうか，家ではどうか。たくさんある疑問符を少しずつ解きほどいていく。「これだ」と言い切れるものは未だにないが「たぶんこれだろう」と思われるものはどんどん増えてきた。ここで，「これだ」と決めつけるのではなく，さらに的確なWBを求めて探求し続けることが重要である。メンバーからの応答は「笑顔」「表情の変化」「何かを感じている眼の動き」など，これは人によってそれぞれ異なる。メンバーの一人ひとりの身体的状況は異なり，動かせる部位や可動域も限定されている。この人は足の動きで，この人は瞬きでYes/Noサインを送ってくれる。多種多様なコミュニケーションのとり方を１つ１つ，メンバーと相互に了解を作り上げるのに，莫大な時間がかかった。ほんの少しの小さな表情や動き，変化を見落とすことのないようにかかわり続けていくと，職員が何かをしてあげているのではなく，メンバーと一緒に何かを見つけていこうとしているような一体感に変わってくる。なぜなら，メンバーの協力なしには，活動は成り立たないからである。

メンバーは朋で，クッキーやジャム作り，和紙染め，アルミ缶リサイクル，器楽演奏などの活動や作業を行っている（日浦 1996: 59–130）。しかし，肢体のごく一部，ほんの少ししか動かない人がほとんどであるため，そのほとんどは，職員の手添えによるもの



写真１　群馬県の温泉を汲みに行き施設の風呂で温泉を実演
（撮影：日浦）

である。それゆえメンバーは，健常者の言う，いわゆる「労働」はできない。しかし目の前でクッキーの生地を真剣な眼差しで見つめているメンバーにとって，「見つめている」という行為，これは，朋のクッキー作り作業の中で不可欠なものであり，活動自体を構成している。朋ではこれを「仕事」として捉えている。

一方，何らかの助けがあれば，手や足を動かし，自身が活動に参加することができるという場面も多々ある。そこから達成する喜びを得ることが出来ればと願い，職員は木材やダンボール紙で工夫し，補助具を作って，活動に参加している実感を得る方法はないか，と模索してきた。しかし，福祉職の知識や技術の限界から，思いがあっても実現できない悔しさを味わってきたのも事実である。ここに，工学という異分野との協働の場が拓けるが，これは３節で詳しく述べる。

日中活動だけでなく，盆踊り，クリスマスイブの外出，旅行も，年中行事のようになってきた。しかし障害が重い人たちの外出は，体調が不安定で難しい状況もある。場合によっては医師や看護婦の付き添いも必要になったが，いずれも協力が得られた。中には体調が悪くて旅行にいけない人もいた。そんなとき，夜，遠路群馬県まで温泉を汲みに行き，施設の風呂で温泉を実演したこともある（写真１）。職員と親だけでなく，医療関係者とも協働で青年が地域で普通に暮らすWBを模索し続け，そして実践してきた。

このような地域との関係は，どの局面においても，重度の障害のある人のWBがどこにあるのかを探求し，共有する営みであった。このような行政との関係は，70年代の障害者自立運動とは異なる。ギリガンの枠組みでいえば（Gilligan 1982: 61–63, 100–101），個人の権利を主張し勝ち取る，という従来の「正義の観点」によるものではなく，困難を抱えている人の必要に応える，という「ケアの観点」によるものとみることができる。日浦は常に，このような「ケア」の視点に立つように職員を教育し続け，2010年３月，理事長職を辞し，作業所時代から育てた職員に，理事長・施設長を任せた。地域社会との連携の下に当事者のWBを実現する朋の営みは，今も続いている。

2.5 教育との連携

地域の中に小学校，中学校，少し離れて高校がある。小学校との交流は，七夕集会という学校側から招待を受けたことがはじまりである。これは，校庭で対面の全校集会のような形をとるもので，当時，小学校ではめずらしくはなかった。確かに子供たちがもてなしてはくれるが，どことなく距離があり，どちらも仲良くなったという実感がわかなかった。

何とかもっと距離感が縮まる交流ができないか，職員たちは話し合った。そこで何度目かのときに，メンバーが代表で挨拶をすることになった。本人は声が「アー」と抑揚がついて出るが，言語表現はできない。事前にメンバーと職員と，どのようなメッセージを送るか，打ち合わせをして当日にのぞんだ。職員が１つ１つ挨拶文を考え，Yes/Noサインで確かめていく。当日は本人が声を出し，職員が一緒に考えた挨拶を読むというやり方をとった。その七夕集会に参加した子どもたちは，そのアーという声に，真剣な表情でじっと耳を傾けていた（写真２）。ある先生は，以前，自分はこのような会は，所詮やらせで，大人が勝手に作ったプログラムに子供たちと障害者を参加させる形をとることしかできない，と考えていたことを恥じたという（日浦 2001: 小学校との交流・スライド４枚の章)。

その後は，七夕集会だけなく，触れ合うチャンスを年間の中でいくつか作り，継続的に行うようになった。近年は，小学校の先生と職員との交流会を年１回行い，互いの情報交換や行事の進め方について相談し，学年によって年間ベースでスケジュールを決めていくような形に変化してきている。総合的学習で，和紙染めや空き缶プレス作業の手伝い等を行う。また，人権教育の一環として，バンブーダンスやフラダンスを一緒にやろうという学校もある。８歳９歳の子供たちは違和感なく，ごく普通に施設に入りメンバーの横についたり車椅子を押したりする。毎年のように，小学４年生の行事である，「２分の１成人式」に朋のメンバーが招待される。2010年には，「お父さんお母さんあり



写真２　七夕集会に参加した子供たちは，そのアーという声に，真剣な表情でじっと耳を傾けていた（撮影：生田目）

がとう，先生ありがとう，朋のみなさんありがとう」という挨拶があったという。

中高生を対象にして，10年ほど前はボランティア体験実習を受け入れていたが，近年，ゆとり教育の見直しなどの影響で，カリキュラムの中で体験実習を実施することは難しくなってきた。しかし，小学生時代の経験は深く根付いており，中学校の福祉委員は，抽選になるときもあるほどの人気である。朋の日中活動の時間の訪問は難しいが，放課後，アルミ缶のプレス作業を手伝ってくれる中学生は絶えることはない。高校生になると年間をとおして何かをすることは難しくなる。それでも，毎年，バンド活動をしているメンバーは，近くの高校の文化祭に招待されて出演している。

大学生については，いくつもの大学から実習生を受け入れている。福祉関係以外，例えば，工科系，政経系，哲学系などの学部からの依頼も来ている。工科系の学生はメンバーに対して，自分が学んでいる学部学科の中で活かせるものは何かという視点をもっている。そしてそのためにはまず本人を知ることから始めなければならない，ということも次第に理解していく。自分が学んでいることから入っていくのではなく，その本人が「何があれば今よりも可能性を見出すことができるのか」ということに気が付いてくれる。それはまさしく双方向のやり取りである。福祉職では思いがあっても現実味がないことも，工科系の学生は，持ち前の工学技術で解決に向けて取り組んでいる。この取組みの詳細は本章 3 節で論じる。

2.6 ケアリング

ここで，訪問の家における実践について，その諸特性を考察する。

日浦は朋開所から現在に至るまで，重度の障害者の権利主張という立場ではなく，障害者の WB の実現を行政・地域と協働で行い，朋は教育の場という役割も荷うようになる。このような広がりが得られた過程を，次のように分析することができる。

① 地域，行政，学校等にはたらきかけ，障害の重い人一人ひとりと出会う場を作り，それぞれが困難な状況に置かれながらも，それぞれが個性をもち逞しく生きていることを知ってもらう。
② 障害の重い人一人ひとりの WB 実現の方法を，行政や地域の人々と協働で探求する。
③ 協働の取り組みにより WB が創造された喜びを，障害のある人と親だけでなく，地域や行政等，支援者や協力者と共有する。
④ ボランティア活動の場として朋を広く地域に拓く。
⑤ 小・中・高の「総合的学習」やボランティア体験，医学部・看護学部・歯学部だけでなく多くの学部の実習のために朋を教育の場として提供する。

このような過程の中で，まず重要なのは，①から②への移行である。この点において，朋のメンバーの役割は大きい。彼らは，重い障害のため，自分で話すことも移動するこ

ともままならない状況である。朋を訪れた人は，日中活動における日常的なコミュニケーションの場で，メンバーと出会う。職員の問いかけに対して，メンバーからの言語での応答はない。しかし，本人の表情やちょっとした動きの中にその答えがあるように見えてくる。それはまだ明確にならない，メンバーのWBである。それを探求するやりとりの中に，メンバーは来訪者を自然に巻き込むのである。そして，その形が少しずつ見えてくると，なお一層，その探求にかかわりたくなる。WBの協働探求に人々を招くのは，まさしくメンバーの「働き」であろう。メンバーは世間でいう労働，「働く」ということはできないが，周りにいる人の協働の場を，何も言わずに拓いている。このような協働が拓かれた要因として，日浦が常に，障害者一般の権利主張という「正義の観点」には立たず，常に障害のある人の個々の困難を指し示し，ギリガンのいう「ケアの観点」へと誘ったことがある（Gilligan 1982: 61-63, 100-101）。

ノディングズによれば（Noddings 2005: 16; ノディングズ 2007: 43-45），ケアリングは最も基本的な形において，ケアするものとケアされるものとのつながり，あるいは出会いである。そして，ケアしているとき，私は他者が伝えようとしていることを誠心誠意聞き，見，感じている。短い出会いにおいてケアするものとして，注意深くあると同時に，必要に迫られている人を助けたい，という欲求も感じる。そのような意識状態を特徴づけるのが，「動機づけの転移（motivational displacement）」である。それは，私たちを動機づけるエネルギーが，他者と他者の課題に向かって流れ出すことを意味する。他者が伝えているものを受け取り，他者の目的や課題を助けるように対応したいと望む。自分自身の課題を考慮し，計画し，再考するのと同じように，今度は自分たちが他者を助けるために何が出来るのかと考え，他者のニーズに心を奪われている。

このように考えると，開設当初から朋を支えている地域の主婦たちとメンバーたちの関係が，介助や送迎も「わが子と同じ」という関係が成立したことは（朝日新聞 1987），ケアリングが血縁や専門職を超えて，地域に広がったとみることができる。朋，親，地域は，常に，個々のメンバーのWBの実現を目指している。ケアリングという双方向の関係性は，福祉職がそれ以外の分野の人々や地域の多様な立場の人々と一致して協働するための鍵だといえる。

次に，②から③への移行プロセスで重要な役割を果たす「喜び」について，そして④⑤に見られる「ボランティア」「教育との連携」について考察するために，次節では，湘南工科大学における工学教育における実践を分析する中で，論を進めることにする。

3　福祉ものづくり

3.1「福祉ものづくり」創設の経緯

湘南工科大学（神奈川県藤沢市）は，朋との10年以上の交流における試行錯誤の中で，

「福祉ものづくり」という独自の工学教育プログラムを構築し，2006年には「訪問の家と湘南工科大学の『工学技術による障害者支援モノづくり』の推進に関する覚書」を締結した。ここに至る経緯を簡単に紹介する（田坂・石村・水谷他 2007; 田坂・木枝・石村・大野・水谷他 2008)。

3.1.1 ボランティア体験学習

訪問の家と湘南工科大学の連携は，1996年に「ボランティア論」の立ち上げの際に，「倫理」という科目担当者であった田坂さつきが，当時の朋の施設長日浦美智江に，科目運営を相談したことにはじまる。田坂は，ボランティアの現場から，当事者や支援者約10名を招くオムニバス講義と，講義内容と連動するボランティア実習，その両方が一体となった授業を模索していた。日浦は，「ボランティア論」の初回の講師を引き受け，朋では学生のボランティア実習を受け入れることになる。そして日浦は，講義だけでなく実習の受け入れと指導が可能な講師を田坂に紹介した。「ボランティア論」の一環として実習を行う場合，実習は10時間程度しか行えない。これは，ボランティア経験としては極めて短かった。そこで2002年には，「ボランティア論」はオムニバス講義科目とし，60時間実習ができる「社会貢献活動」という授業科目を別途創設することになる。その後，学生は，実習やボランティアとして朋を訪れるようになった。しかし工学部の学生が，福祉系の学校の実習生に対して，福祉を専門に学んでいない点で引け目を感じていることに，田坂は気づく。

3.1.2 工科系の特性を活かしたボランティア活動

そこで，工科系の学生らしい福祉とのかかわり方を，田坂は職員と共に検討するようになる。その中で，工科系の学生の特質を活かすボランティアとして，朋のパソコンネットワーク環境の整備やホームページの更新というアイディアが生まれる。2003年，情報工学科の川口くんは，快くこの種のボランティアを引き受けてくれたが，学生だけの力では限界がある。そこで田坂は，同大電気工学科の水谷光に協力を求める。川口くんが水谷の助言を受けながら，工学技術を活かしたボランティア活動が始まる。川口くんは，メンバーや職員ができないことを，工学の知識や技術によって実現できると自信と誇りをもち，卒業後現在に至るまで，年に何度か休日に朋を訪れている。

一方朋では，近隣の家庭をまわり，アルミ缶を回収し，施設でプレス作業をしてリサイクル活動を続けている。しかし，重度の障害のあるメンバーは，健常者用の缶プレス機器を使用して作業を行うことはできない。そこで，「手添え」と言いながらも，実質的には職員が作業を代行し，缶をプレスしていた。メンバーのひとり，ふさえさんは，自分の意志で作業をしている実感を得ることが難しく，缶プレス作業に対して意欲がもてない。ふさえさんは車椅子生活であるが，ほんの少し手が動く。2004年，職員が缶プレ



写真３　缶つぶし作業を行うふさえさん
（撮影：生田目）

ス活動について，ボランティア学生の村石くんに相談をもちかける。職員は村石くんに，「人の力を借りてやるのではなく，メンバーが自分の力を活かすことができる活動をメンバーに提供したい」と話し，「機械工学を学んでいる学生として案があったら教えて欲しい」と投げかけた。ここから，障害を持った人が行う缶プレス作業の課題解決が始まる。重度の障害のある人との出会い，そしてケアリングという関係性が構築され，WB の探求がはじまったのである。

村石くんははじめに，レバーを引けば，空き缶が上から落ちてくる装置を考案する。しかし，ふさえさんの視界からはレバーと缶の動きとの連動が見て取れず，自分が作業をしている実感がわかない。一連の作業がふさえさんにすべて見えるようにしてほしい，と職員は要望する。しかしこれは実は困難な課題であった。缶プレス機は車椅子よりも高く，缶をプレスする様子は車椅子に乗ったふさえさんからは見えないからである。当時は，ビールケースに板を載せた不安定な台の上で作業を行っていた。

村石くんだけでは課題解決は困難である。そこで何人かの学生に助けを求め，缶プレス機を傾け，車椅子に合う高さに調整することを考案する。高さ調整さえできれば，ふさえさんだけでなく，他のメンバーも，それぞれがやりやすい高さにあわせて作業ができる。さらに学生たちは，缶の投入口を改良して，潰すところが見えるようにする（写真３）。これは大がかりな改良で，水谷だけでなく，機械工学の専門教員や機械工場技術員の協力が不可欠であった。田坂が湘南工大の機械工学科の教員らに協力を要請すると，学生の製作への助言と作業支援の協力を得られるようになり，工学ボランティア活動は次第に大学全体に広がっていく。

障害者対応缶プレス機の製作を半年間見守っていた，訪問の家職員山本佳一は次のように述べている。「改良を重ねたプレス機が大学の工場で完成し，試運転の日を迎えたとき，誰もが緊張した面持ちで彼女を見つめていた。彼女の手が動き『カタン』と缶が落ちて潰れた後，彼女の顔が笑顔に変わった。その表情の変化に，私たちの緊張は解かれ，誰の顔にも微笑みがこぼれていた。『すごいね！』『よかったね！』，次々とかけられる声

に，彼女は笑顔で応えていた。そのとき学生の顔には，笑顔と共に達成感が満ち溢れていたように感じられた。これが朋にとって湘南工科大学が実習・見学の相手ではない，共にメンバーを支援する連携相手へと変わった瞬間である。〔中略〕朋と湘南工科大学との連携は，互いに大きな変化をもたらした。朋は，工学という分野の協力を得たことにより，常に既存製品の利用方法に自分達が合わせなくてはならなかったメンバーは，個人の視点に合わせてつくられた製品を得ることができるようになった。これにより，メンバー一人ひとりが自分の力を活かすことのできる活動参加の機会が増え，生活の幅を今まで以上に広げることが可能になったのである。」（山本圭一 2006: 57）。

3.1.3 工学部教育として

2005年，田坂は湘南工科大学社会貢献活動連絡協議会の主査となり，同年，訪問の家「朋」及びそれ以外の事業所通所者の要望に応えた「障害者支援モノづくり」（後に「福祉ものづくり」と改名）は，授業科目「社会貢献活動」の実習に加わった。同科目は，後に，100時間の実習が可能なサービスラーニング[8)]型の授業となる。同協議会は，田坂と工学部の全学科の委員から構成されていた。そこで「障害者支援モノづくり」は，文理連携体制，すなわち，田坂は倫理に関する事前学習，聴き取りや調整の場の設定を行い，各学科委員は学生の製作をサポートする，という体制になったのである。その頃，機械デザイン工学科委員の勝尾正秀は，癌の末期の体をおして，機械工学の知識と技術を訪問の家のメンバーのために活用しようと最期まで「障害者支援モノづくり」の進展に力を尽くす[9)]。その後，勝尾の思いを継ぐ多くの学生や教員たちが，この活動を支えるようになる。

勝尾は，病による不自由を自分の身で感じながら，ケアする側／ケアされる側，両方の視点からWBを探求し学生を指導した。このとき，勝尾自身のWBは，自身の安楽な状態を保持するのではなく，知識や技術を他人のために活かすことにおかれていた。この頃から，湘南工科大学は，障害や難病とともに生きる人を社会貢献活動の学生指導のために雇用し始めた。2005年から遠位型ミオパチ―患者葛西成泰が，また葛西に加えて，2006年から進行性骨化性線維異形成症（FOP）患者飛田和子が，テクニカルアドザーとして着任する。また2008年には，筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者舩後靖彦が非常勤助手として雇用された（朝日新聞 2008）。

以後，朋のメンバーを中心とした，障害をもつ人の生活支援具がいくつも完成する。これまでの製作物には，障害者対応缶潰し機１・２号機，空き缶供給機，楽々スイッチ，障害者対応粉ふるい機，大型車椅子用体重計補助ステップなどがある（表３）。朋は学生の実践的な製作技術の学びの場となった。学生のメンバーへの思いが，市販品では困難な当事者の目線を生かした製作品として実現し，朋の日中活動の中で使用されている。

表３　訪問の家での「福祉ものづくり」製作物　（2010年２月16日現在）

品　　名	配　　置　　先	製 作 年
障害者対応缶潰し機１号機	訪問の家　朋	2004-2005
コミュニケーションボード１	訪問の家　径	2004-2005
障害者対応缶潰し機２号機	訪問の家　朋	2005-2006
楽々スイッチ	訪問の家　朋	2006-2007
空き缶供給機	訪問の家　朋	2005-2007
大型車椅子用体重計補助ステップ	訪問の家　朋	2007-2008
障害者対応粉ふるい機	訪問の家　朋	2006-2007
音楽の出る歩行器	訪問の家　朋　分室　CAN	2006-2007
コミュニケーションボード２	訪問の家　径	2006-2008
障害者ワープロソフト	訪問の家　径	2006-2007
ユニバーサルタイプCDラジカセ	訪問の家　径	2007
手押し車補助具	訪問の家　朋　分室　CAN	2007-2009
車椅子用補助具	訪問の家　朋　分室　CAN	2007-2008
サウンドマシーン	訪問の家　朋　分室　CAN	2007-2009
しゃべる缶回収箱１(小学校)	訪問の家　径	2007-2008
しゃべる缶回収箱２（バス停）	訪問の家　径	2007-2008
車椅子用缶つぶし補助具	訪問の家　朋	2007-2008
ひびきバンド用楽器(太鼓)	訪問の家　朋	2009-2010
みのり用楽器（鉄琴）	訪問の家　朋	2008-2010
ボーリングストライクマシン	訪問の家　朋	2008-2009
空き缶供給器２	訪問の家　朋	2007-2008
スヌーズレン用機器	訪問の家　径	2008-2009
音楽の出る歩行器２	訪問の家　径	2008
電子灯篭「と～ろ～」	訪問の家　朋	2006
竹酢酸充填用ポンプ	訪問の家　径	2009
竹酢酸充填用ポンプ２号機	訪問の家　径	2009-2010
スヌーズレン用機器２号機	訪問の家　径	2009-2010

3.1.4　大学と福祉施設間の覚書締結

2006年，社会福祉法人「訪問の家」と湘南工科大学とは「訪問の家と湘南工科大学の『工学技術による障害者支援モノづくり』の推進に関する覚書」を交わす。障害のあるメンバーが，製作物を長期にわたりモニターすることにより，学生たちはニーズに限りなく近づくものを探求し続ける。それゆえ，製作したものの所有権は湘南工科大学にあり，ものづくりは，あくまでも教育の一環として行う。これは，工学技術者として，ニーズに応えることの難しさと喜びとを体験する中で，技術運用力を磨くための教育活動なのである。ここには，当事者のWBをものづくりによって訪問の家と協働で実現する，と

いう精神が明確に現れている。

このように，「障害者支援モノづくり」は，訪問の家が行なってきた重度重複障害者のWBを創造する取り組みを工学的に実践し，教育に取り込んだものである。なお，障害という言葉に抵抗をもつ人が多かったために，2006年，「障害者支援モノづくり」は「福祉ものづくり」と改名されている。「福祉ものづくり」とは，学生がメンバーの個別のニーズを工学的に解釈し，当事者に適した障害者支援機器を設計・製作するものである。これは，当事者と同じ目線に立ち，現場の希望や期待に応えるものである。これは朋のメンバーのWBの創造だけでなく，学生の専門的な知識や技術の創造的応用力育成にもつながっている。

3.2 WBの実現と喜び

「福祉ものづくり」において，学生は，メンバーと出会い，要望を聴きとりながら，必要な生活支援具の形を捜し求めるケアリングの関係にはいる。学生はまず，要望を受け止めて想像してつくってみる。使えないものができてくることもある。未だWBを創造できないものだったのだ。でもそこでは終わらない。それのどこが良くないのか，それを問いかけ，修正しては使ってもらう。完成するまでには，試行テストと改良を積み重ね1年程度の年月を必要とする。この全過程を工学部の教員が見守り，必要なときに支援をする。効率や経済性という価値を導入すると，本来求めるべきものを見失うことになる。

プラトンは，技術は報酬獲得術ではないという（プラトン『国家』：346a6–d9）。しかし，現代では，技術を行使する前に，それによって報酬がどれほど獲得できるか，ということが問われてしまう。重度の障害がある人の生活には，24時間の看護や介護が必要であり，そのような技術をもつ専門職はいる。障害や病にある人への個別の生活支援具を作る技術を持つ人もたくさんいる。しかしいずれも，その専門職がそれに見合う報酬を得る仕組みがないために，その技術は活用できない。現代社会では，技術と報酬獲得術が融合しているからである。ここには，技術や研究，人間の行為や選択のあり方全体がおかれている大きな問題がある。

それゆえ，学生は，「福祉ものづくり」をとおして，報酬獲得術から離れたものづくり，いわばものづくりの原点を体得することができる。まず，効率や採算を重視するために，汎用性が高いものしか作られない現実の中で，作り手主導の製品ではなく，使う人の視点に立って製作する経験を重ね，その価値を知ることができる。さらに，こういうものが欲しいという望みに耳を傾け，そのニーズに応えることの重要性を学ぶことができる。

プラトンは次のように言う。「それぞれのものを使う人こそが，もっともそのものに通じている人であり，そして，自分の使うものが実際の使用にあたって，どのようなよい

ところあるいはわるいところを示すかを，製作者に告げる人となるのだ（プラトン『国家』：601d8-10)。〔中略〕製作者の方は，知っている人とつき合い，知っている人から聞かなければならない。それによってその道具のよしあしについて正しい信念をもつことになる（プラトン『国家』：601e7-602a2)」。これがプラトンの言う「弱者の利益を実現する技術」のあり方である。これは，「福祉ものづくり」を実践した学生が使用者へのWFという視点から脱却し，使用者のWBの探求に向かうためには重要である。

しかし学生が卒業して社会に出ると，実際には，技術的には可能でも，現実的には難しいことがらは多々ある。その多くは，経費がかかるとか，人員を割けない，等，経済効率という価値にそぐわない点であろう。たとえば，障害が重い人も，医療機器や自立支援機器の装着等により，地域での生活は技術的には可能である。このような形でのWBの探求は，福祉職と工学技術者が共同で実現可能である。その経費の工面をどのように制度の中で可能にするのかは，解決すべき別の問題である。しかし現実的には，福祉職が工学的な問題解決を工学技術者と共に探求しない限り，工学によるWBの実現は塞がれてしまう。

これは社会の現実として受け止めなければならない。しかし研究の現場では，経済効率をよりもまず，WBに適切に応える技術を研究して開発し，その上で，経済効率の問題を解決する方法を考案すべきである。経済効率という問題をどのように解決するのかは，本来，技術開発と別の問題だからである。経済効率という障壁を乗り越えられない技術開発にブレーキがかかる状況において，最も懸念されるのは，WBを社会で実現することをめざす技術者の育成である。これこそ，大学教育の目指すべきところである。このような観点からも，訪問の家のような場が，教育において果たす役割は大きいと考えられる。

ここで，教育現場における知識の習得の仕方について考えてみたい。多くの場合，教科書や講義で個人が知識を習得し，実習等で個人がスキルを習得する。これは，必要な場面で活用可能なスキルを習得しているのであって，実際に活用しているわけではない。アリストテレスは建築を学習するのは，建築活動をすることによってであり，実際に建築活動をすることにより建築家になるという（アリストテレス『形而上学』：1049b 29-1050a2)。つまり，建築家が実際に家を建てる活動を間近に見て，ともに活動に参画するところから技術教育がなされ，現場で活用可能な知識や技術が習得されるのである。それゆえ，実際に建築活動をするのではなく，教室で擬似的な場面を設定して行う実習だけは，知識や技術の習得のためは有効であっても，技術者教育として不十分になる。実際に技術者が活動するときに求められるのは，現場のニーズに適切に応えることその一点である。これは学生時代に学び取るべき根本的な事柄なのである。

朋において，使用者のWBを探求して製作する中で，学生は工学技術のあり方と技術者倫理とを学び，学生は工学技術者としてのWBに至る。ここに，工学技術者としての



写真 4　山田くんの製作した機器を使って缶つぶし作業をするけんさくさん（撮影：生田目）

やりがいと喜びが生まれる。「福祉ものづくり」そのものが，教育の場となるのである。このことを如実に示すものとして，下記のエピソードがある。

朋には，多様な重度の障害者が通所しているが，けんさくさんは肢体のほとんどが動かないが，わずかに右手の薬指の指先と目線だけを動かすことができるメンバーである。学生の山田くんは，このわずかな動きによって，空き缶を缶プレス機に投入する装置の製作を依頼された。わずかな動きの小さな力を使い，本人が作業の実感を得られるよう，空き缶が缶プレス機に投入される様子がよく見えるように工夫した装置を開発した（写真 4 ）。一度製作したが満足なものとはいえず，けんさくさんと何度も相談して不具合を修正した新しい機器を製作した。その機器を朋にもち込み，初めて使用した際のことである。けんさくさんは，この 2 号機を快適に使いこなすことが出来た。機器を何度か試した後，けんさくさんは山田君をみつめた。周囲の人には，これが「ありがとう」という目線であるように見えた。一方，山田君もけんさくさんに「ありがとう」という。山田くんは，「使ってもらえることは，本当に嬉しい」と涙ぐむ。山田くんを製作に駆り立てたものは，WF ではなく WB の創造であった。機器を製作することではなく，作った機器がけんさくさんの WB 実現のために有効であったことをその場で確認できたのである。自分の製作した機器がけんさくさんの WB を構成していること，そのことに対する喜びと感謝を山田くんは述べている。

ここに，山田くんの技術者としての WB の実現とみることができる。技術とは，障害により不自由な状況にあるけんさくさんのニーズに応えることを目的とし，山田くんはそれを実現した。製作した機器は，けんさくさんの生活の現場でけんさくさんの WB のためには不可欠のものとなった。これは，山田くん自身の工学技術者として WB の実現である。ここに，「福祉ものづくり」が教育として重要な意味があることが示されている。

3.3 技術と教育

以上の考察に従えば，訪問の家「朋」における「福祉ものづくり」は，重度の障害があるメンバーのWBを協働で探求する文脈において，工学的な知識と技術を実践することにより，当事者のWBを実現する，という営みといえる（第２章2.6における②と③を参照）。WBを探求する中で試行錯誤して達成するプロセスは，介護技術，看護技術，コミュニケーション技術等，実践をとおして得られる高度な技術の習得過程にもある。時間がかかり苦労も多いが，現場のニーズに適切に応えられる技術を身につけるためには，本来必要な過程である。このプロセスを学生が歩み続けることができるのは，これには喜びが伴うからであろう[10)]。

朋のメンバーのWBが実現したとき，言葉をもたない彼らは，笑顔で答える（写真５）。自分の力を存分に発揮して，メンバーのWBを実現できたと思ったとき，学生たちの喜びは大きい。そこに至るまでの過程が長く苦労が多ければ多いほど，その喜びは大きい。「福祉ものづくり」で学生が得られるものは，工学技術だけではない。技術だけの習得ならば大学内で実施される実習でも可能である。しかし，訪問の家では，利用者の要望に応えるという本来の「技術」を学ぶことができ，ごく自然に「当事者の視線」を意識することができるようになる。そして学生自身も，工学技術を社会に活かすことができる喜びを享受し，技術者としてのWBを実感できるのである。この結果，学生の勉学意欲は向上し，さらに技術運用力を磨くことができる。「福祉ものづくり」は，プラトンが言うような「技術は支援を受ける人のニーズに応えるためのもの」という理念の下にある（プラトン『国家』：342b1-8）。これを誠実に実践してきた朋という場を得たことによって，WBの実現を中核とした技術者教育が実現したとみることができる。

当事者を中心にWBを実現するという同じ目的を実現しようとする人が集えば，工学と限らず，協力関係の構築は容易である。朋の取り組みが順調に進んだのは，当事者のWBの実現にあたり，様々な人々の多様な技術や知識を活用して，具体的な実践をひとつひとつ目指したことがある。日本の福祉に関する問題は山積している。多様な分野の



写真５　学生はメンバーの笑顔を目指している
（撮影：生田目）

人々と議論する機会はあるが，そこから先に進むことが重要である。つまり，それを具体的な実践に結びつけるためには，技術や知識を現場で具体的に活用できる場が拓かれなければならない。そこで当事者のWBが実現したとき，この実践に参加したすべての人に喜びが生まれる。このような当事者を中心にしたソーシャルアクションを朋は実現してきた。ケアという観点に立つ日浦の下に，それぞれの力量を発揮する分業体制が構築された。当事者のWBを実現すべく，それぞれの分野の人がそれぞれの力を朋で活かそうとしたのである。それを，高度な支援技術を身につけた職員，行政や地域の人々，大学の研究者が見守り，人を育てる。そしてそのような支援者たちは，朋に限らず，実際に社会で自分の技術を活かせるという，その人自身のWBをも実現していくのである。

ノディングズは「ケア」を一方的なものではなく，「ケアリング」という双方向の関係性において捉えるが，ケアする際におこる「動機づけの転移」について，次のような2つの事例を挙げている（Noddings 2005: 16；ノディングス 2007: 43-44）。大学のキャンパスで，学生が見知らぬ人に道を聞かれる。そのとき学生は，ほんの少し前まで別のことをしようと考えたのに，今はその人がいかにしたら目的地に間違いなくたどり着けるかという，その人の課題に向かう。ここに動機づけへの転移がある。また彼女は，靴紐を一生懸命結ぼうとしている子供を見守る大人の例を挙げる。うまく靴紐が結べるように，という動機づけが転移し，見守る大人の指が共感的に反応して動く。そして，課題が達成されると，自分のことのように支援者も喜ぶのである。このように，当事者のWBの実現という課題解決に向かう複数の支援者は，共に動機づけの転移を経験するのである。

訪問の家の実践事例においては，当事者のWBを協働で探求する際に動機づけの転移がおこり，ケアリングという双方向の関係が構築され，その関係性ゆえに，ものづくりという長い営みを経済効率を度外視して継続できた，とみることができる[11)]。またメイヤロフは，感謝とは，ケアしケアされる補充関係が成立しているような「場の中にいる」ことから生じる自然な発露であり，自分が他者から受け取るのは，自分が与えているからなのだ，という（Mayeroff 1971: 102-104；メイヤロフ 1987: 176-181）。朋の建設を一時反対していた自治会の主婦たちが，ボランティアを続けるなかで，「今では私の生きがい」という言葉が出るのも（朝日新聞 1987），当事者のWBの実現という課題に向かって，ケアリングの場の中に身をおいたゆえであろう。

さらにノディングズは，教育現場でケアを学ぶ重要性を説き，教育の主目標は，有能で，ケアし，愛し愛される人を輩出すべきだ，という。（Nodding 2005: 173-174；ノディングス 2007: 309-310），福祉の現場には，作業療法士や理学療法士という専門職もいる。彼らは，専門技術を学び現場に入る。しかし学校では，模擬的な実習はあったとしても，重い障害の人と協働でWBを探求する経験はまずない。それゆえ，卒業後習得した技術をそのまま朋のような現場で使用しようとしても，ニーズに合わず，当惑するこ

とも少なくない。「福祉ものづくり」のように，協働で可能性を模索する創造的な関わりは，作業療法士や理学療法士が現場で技術や知識を活かすためにも必要であろう。朋の職員と協働で，当事者のWBを実現するために更に良い方法はないかと共に考える営みの中で，当事者の活動だけではなく，関わっていく人間が変化していく。支援する人のもっている技術や知識を現実の場面で活かすことができるようになり，より高度な技術が習得されるのである。そしてそのような活動をとおして，工学技術者として，介護士として，理学療法士として，ソーシャルワーカーとして成長するのである。ここが，朋が教育の場として重要な所以なのである。これは，社会に出る前に，学校で経験できるのが理想であろう。

2008年から2010年，田坂は立正大学文学部に移籍したことを機に，「福祉ものづくり」を中心にすえたワークショップを，工学だけでなく，哲学・社会学・社会福祉・心理学を学ぶ学生と一緒に行っている。そして，田坂ゼミの学生たちは朋で研修をするようになり，2010年から，「福祉ものづくり」のインターフェイスのデザイン部分を担当するなど，共同製作が実現している。哲学科の学生は，メンバーとの出会いをとおして，難病患者や重度重複障害者の尊厳死問題について，倫理的考察を深めていく。学生達はそこでの学びを彼ら自身の立場から，社会に伝えていく。ここでの経験がその次へと着実につながっていくのである。

4　おわりに

効率や能率を求めて個人の財を獲得することを１つの目標とする現代社会の中で，重い障害がある人は困難を抱えている。「訪問の家」の事例を分析する中で，その人を救済するというWFの視点ではなくその人のWBを実現する視点に立つためには，２つのことが重要であることが明らかになった。まず，困難を抱えている個々の当事者との出会いにおいて，ケアしケアされる相互関係（ケアリング）を構築すること。そして，当事者を中心に，当事者のWBを協働で探求し実現する場を拓き，具体的な技術や知識を活用して問題解決を図ることである。そして，上記２点を実践する教育の場として，朋が重要な役割を果たしていることが確認された。そしてこの２点に実践する教育として，「福祉ものづくり」が有効であることが明らかになった。

訪問の家では，「福祉ものづくり」をとおして，職員も学生も，指導する教員も，何より朋のメンバー一人ひとりの可能性を信じ，実行することの大切さを実感している。何度となく検討し，試作し，検討する，この過程なくしては，ものは完成しない。障害のある人が実際に使うことができ，そこに嬉しそうな表情を見つけたとき，製作した側とメンバー相互に感謝と喜びが起こる。そして納品して，モニターが始まる。そこで改善点が見出されれば，改良を繰り返す。この繰り返されるWBの形を創造する営みにおい

て，メンバーが中心的な「働き」をしていることをみることができる。

訪問の家における「福祉ものづくり」の事例を分析すると，WBを探求し実現する場は以下のような構造をもっていることが明らかになる。WBは当事者と出会い，聴くことから始まる対話によって模索される。WBを探究するプロセスの中に試行錯誤がある。試行錯誤の中で，当事者も支援者も互いにありのままの自分を明かし，それを相互承認する。ここに「ケアリング」という互いに気遣い合う関係が構築される。多様な技術や学識をもった人々が，当事者のWBがそもそも何かを探求し続ける，具体的な技術・学識を用いて具体的な形で実現する一連の活動が行われている。そしてこれは，その状態がWBなのか／WBでないのかを，当事者から幾たびも聴き，改善を常に繰り返す活動である。

このように，困難を抱えている人のWBの探求や実現は，長期に亘る困難なプロセスが不可避である。しかも，経済的なメリットもない。このような実践を支えているのは，WBを探求し実践するプロセスの中で，当事者も支援者もともに感じる喜びである。これはケアという観点に立ち，ケアリングという関係性を構築する中で，WBの実現という課題が当事者／支援者ともに活動の動機となるときに成立する。当事者の喜びは支援者の喜びであり，当事者の悲しみは支援者の悲しみである。訪問の家の事例は，このような関係が，重度の重複障害をもつ当事者を真ん中にしたときに実現することを示している。重度重複障害者のWBを協働で探求し実現する場は，創造的なWBを紡ぎだす原点とみることができる。このような創造の場の中心にあるWBは，状況が変化しても常によりよい生へと向かうために，決して固定的なものではない。協働の探求と実践から生まれたつながりは，これからも当事者のよりよい生を探求し続ける基盤となる。そしてその基盤の上に，知識や技術を活かすケアする人自身のWBも実現し続ける教育が可能だといえる。

注

1）テキストの定本は，L. Bywater 1894年校訂の*Ehica Nicomachea*を用いる（Aristotle 1894）。パピルスや羊皮紙による写本の比較検討を経て，現代多くの研究者に信頼されている版であるので，各国語訳においても，概ね，同テキストのページ数と行数を参照するのが通例である。尚，アリストテレスの著書の正確な執筆年は不詳のため，以後本文では，古代ギリシア語のテキストを参照する際の慣例に従い，書名の邦訳とベッカー版のページ数のみを表記することとする。

2）アリストテレスは，医術の目的を健康とし，病気から健康へと変化させるものを医術だと考えている（アリストテレス『ニコマコス倫理学』：1094a8，1096a33）。

3）テキストの定本は，E. A. Dukeらの1995年校訂の*Platonis Opera I*を用いる（Plato 1995）。パピルスや羊皮紙による写本の比較検討を経て，現代多くの研究者に信頼されている版であ

るので，各国語訳においても，概ね，同テキストの数と行数を参照するのが通例である。尚，プラトンの著書の正確な執筆年は不詳のため，古代ギリシア語のテキストを参照する際の慣例に従い，書名の邦訳とステファノス版のページ数のみを本文には表記することとする。

4）トラシュマコスは，「正義は強者の利益である。」と定義するが，ソクラテスはこれに対して，技術に関する事例を挙げて，それに反論する（プラトン『国家』：341b3-342e11）。

5）横浜市が1978年に地域作業所補助金制度を打ち出した。これは，上限を1500万として，その建物の建設費の４分の３は市が補助するというものである。ただし土地の提供はない。親たちはバザーで資金を集め，1979年に障害者地域作業所「訪問の家」を開所，さらに1983年，第二作業所「朋」を開所する。

6）朝日新聞（1984a）では，地元の反対運動に関する記事が形成されているが，朝日新聞（1984b）および朝日新聞（1985）では，地元自治会との折り合いが徐々についていく経緯が記載されている。

7）朋では土曜日に音楽家の演奏会を行い，地域の人を招く。年間開催回数は，2008年は27回，2009年は21回，と毎年20回程度である。毎年演奏される楽器（グループ・音楽家）はマンドリンオーケストラ（アンサンブルパストラーレ），ピアノ（宮川久美），歌・ピアノ（アンサンブルブーケ），ハンドベル（エルバ），オペラ（オペラワークショップ），トーンチャイム（クリスタルデュオ），フルート（立川勲），のこぎり（加藤寛二），アコースティックギター（河本正文），マリンバ（市瀬孝子），琴・三味線・尺八（花かげ），歌（vono*vono-NHK 歌のお姉さん），歌（佐藤慧子），歌（佐藤和恵），コーラス（花のわ）などである。

8）工学サービスラーニングとしての本取り組みの意義については，（田坂 2009）を参照されたい。

9）湘南工科大学工学部機械デザイン工学科准教授。2005年10月16日に逝去。

10）本論文2.6の③における喜びが④への移行を助けると論者は考えている。

11）これは，アリストテレスの言う「フィリア（友愛）」と言う関係性と似ている。なぜなら，アリストテレスによれば，フィリアは，互いに相手の善の実現を望み，それが達成されないことを悲しみ，それが達成されることを喜ぶような関係の中にある。善の実現に双方の存在が不可欠であることが意識される。アリストテレスによれば，「相手方にとってのもろもろの善を願望する」ということが相互に知られている関係である。（アリストテレス『二コマコス倫理学』：1156a9-10，参照）。

文　献

アリストテレス（Aristotle）

年代不詳　『ニコマコス倫理学』：書物としては現存しない。
現存するパピルスや羊皮紙の写本を比較検討した校訂本（注１参照）。

1894　*Ehica Nicomachea*. Bywater L.（ed.）（Oxford Classical Texts）Oxford: Oxford University Press.（日本語翻訳のために参照した文献。2002年『ニコマコス倫理学』朴一功訳，京都：京都大学出版会）

年代不詳　『形而上学』：書物としては現存しない。
現存するパピルスや羊皮紙の写本を比較検討した校訂本。

1957　*Metaphysica*. Jaeger W.（ed.）（Oxford Classical Texts）. Oxford: Oxford University

Press.（日本語翻訳のために参照した文献。上1951年，下1961年『形而上学』出隆訳，東京：岩波書店）
朝日新聞
1984a「障害者施設はなじまぬ」『朝日新聞』朝刊，1984年10月10日。
1984b「具体化へ地元説明会　重度身障者の通所施設問題」『朝日新聞』朝刊，1984年11月28日。
1985「『さあ，施設の建設だ』戸塚区の福祉法人「朋」国庫補助に安堵」『朝日新聞』朝刊，1985年 6 月15日。
1986「重度・重複障害児の通所施設「朋」 苦節10年母親らの悲願実る」『朝日新聞』朝刊，1986年 3 月27日。
1987「障害者施設を文化の拠点にも　進出に一時反対の湘南桂台団地　演奏会開き笑顔の交流」『朝日新聞』朝刊，1987年 7 月 4 日。
2008「難病男性を助手に採用　湘南工科大，福祉の研究開発で」『朝日新聞』朝刊，2008年12月17日。
安積純子・立岩真也他
1995『生の技法―家と施設を出て暮らす障害者の社会』東京：藤原書店。
Gilligan, C.
1982 *In a Different Voice*. Cambridge: Harvard University Press.
日浦美智江
1991「文化施設としての社会福祉施設」『朋・青春―５年間のあゆみ』pp.178-182，神奈川：社会福祉人訪問の家朋。
1996『朋はみんなの青春ステージ』東京：ぶどう社。
2001「『可能性を信じて』―“朋”の実践をとおして」第37回　関東甲信越地区肢体不自由養護学校PTA連合会　総会及びPTA・校長会合同研究協議会　山梨大学記念講演，2001年 7 月30日　<http://www.houmon-no-ie.or.jp/hiura/michie02-kanousei.html>（2011年 4 月13日確認）。
2002『季節のいのち』神奈川：社会福祉法人訪問の家。
2004『みんな一緒に』東京：IEP ジャパン。
2010『笑顔のメッセンジャー』東京：文芸社。
Jaeger, W.（ed.）
1957 *Metaphysica*（Oxford Classical Texts）. Oxford: Oxford University Press.
マッキンタイヤ（A. Maclntyre）
1993『美徳なき時代』篠崎栄訳，東京：みすず書房。
メイヤロフ（M. Mayeroff）
1987『ケアの本質』田村真・向野宣之訳，東京：ゆみる出版（*On Caring*. NewYork: Harper Perennial, 1971）。
ノディングズ，ネル（N. Noddings）
1984『ケアリング：倫理と道徳の教育―女性の観点から』立山善康他訳，京都：晃洋書房。（*Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*. New York: University of California Press, 1997）。
2007『学校におけるケアの挑戦：もうひとつの教育を求めて』佐藤学他訳，東京：ゆみる出版（*The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to Education*.

Theachers College Press 2005)。
Noddings, N.
2005 *The Challenge to Care in Schools: An Alternative Approach to Education*. New York: Teachers College Press.
プラトン（Plato）
年代不詳 『国家』（*Republic*）：書物としては現存しない。
現存するパピルスや羊皮紙の写本を比較検討した校訂本（注３参照）。
2003 *Platonis Rempvblicam*, S. R. Slings（ed.）（Oxford Classical Texts）, Oxford: Oxford University Press.（日本語翻訳のために参照した文献。1979『国家』藤沢令夫訳，東京：岩波書店）
年代不詳 『クリトン』（*Crito*）：書物としては現存しない。
現存するパピルスや羊皮紙の写本を比較検討した校訂本（注３参照）。
1995 *Platonis Opera I*, E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson, J. C. and G. Strachan（eds.）（Oxford Classical Texts）. Oxford: Oxford University Press.（日本語翻訳のために参照した文献。1998a『クリトン』三嶋輝夫・田中享英訳，東京：講談社）
年代不詳 『ソクラテスの弁明』（*The Apology of Plato*）：書物としては現存しない。
現存するパピルスや羊皮紙の写本を比較検討した校訂本（注３参照）。
1995 *Platonis Opera I*, E. A. Duke, W. F. Hicken, W. S. M. Nicoll, D. B. Robinson, J. C. and G. Strachan（eds.）（Oxford Classical Texts）. Oxford: Oxford University Press.（日本語翻訳のために参照した文献。1998b『ソクラテスの弁明』三嶋輝夫・田中享英訳，東京：講談社）
酒井喜和
2004 『変革期の障害者福祉を生きる―娘に育てられて』東京：ぶどう社。
社会福祉法人訪問の家編
2005 『歩いてきた道』神奈川：社会福祉法人訪問の家。
Slings, S. R.（ed.）
2003 *Platonis Rempvblicam*（Oxford Classical Texts）. Oxford: Oxford University Press.
鈴木七美編著
2009 『ライフデザインと福祉（well-being）の人類学―開かれたケア・交流空間の創出』大阪：国立民族学博物館。
鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編著
2010 『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』東京：御茶の水書房。
田坂さつき・石村光敏・水谷光他
2007 「工科系大学におけるサービスラーニング教育―工科系の特質を生かした社会貢献活動実践型授業科目―」『湘南工科大学紀要』41(1): 111-123。
田坂さつき・木枝暢夫・石村光敏・大野英隆・水谷光他
2008 「体験による気づきから学びを引き出す『サービスラーニング』―工科系の特質を生かした社会貢献活動実践型授業科目―」『湘南工科大学紀要』42(1): 107-124。
田坂さつき・大野英隆
2009 「工学部教育におけるサービスラーニング」桜井政成・津止正敏編『ボランティア教育の新地平―サービスラーニングの原理と実践』pp.215-224，京都：ミネルヴァ書房。

山本圭一
2006 「重い障害をもつ人たちと日中生活から生まれたネットワーク―湘南工科大学との連携から築かれたもの」『知的障害者福祉研究さぽーと』N.593: 52-59。